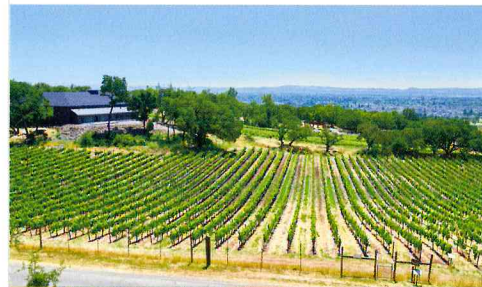
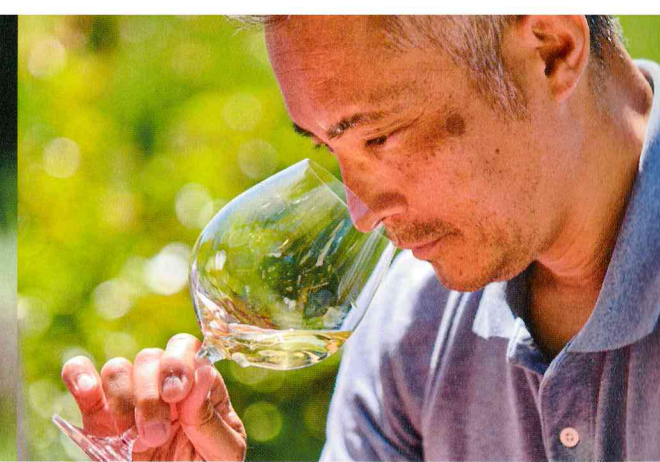
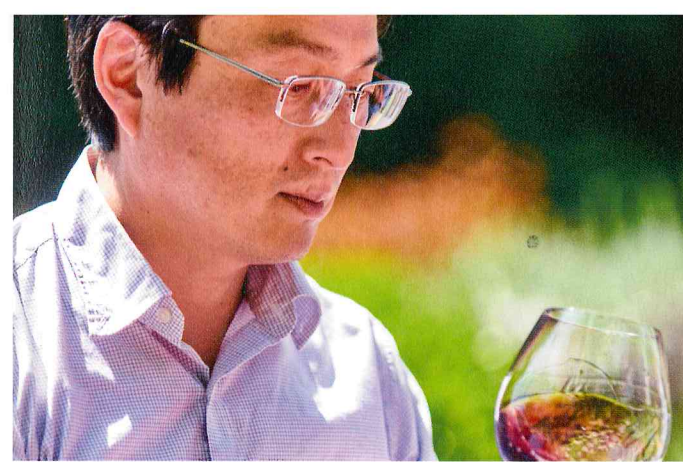


1983年11月、米国大統領ロナルド・レーガンは、日本の国会で演説を行い、尊敬すべき日本人として松尾芭蕉、福沢諭吉、長沢鼎の三人の名前を挙げた。当時の日本で長沢鼎の名を知る人はほとんどいなかったが、大統領演説で「侍から実業家になった長沢鼎は私たちの生活を豊かにし、日米友好の歴史の中で特筆すべき」と敬意を表したことから広く世に知られるようになった。遠く離れた米国で「Grape King」、「Baron Nagasawa」と呼ばれた長沢鼎とはいったいどんな人物だったのだろうか？ 1852年、鹿児島城下で磯長孫四郎の四男・磯長彦輔として誕生。

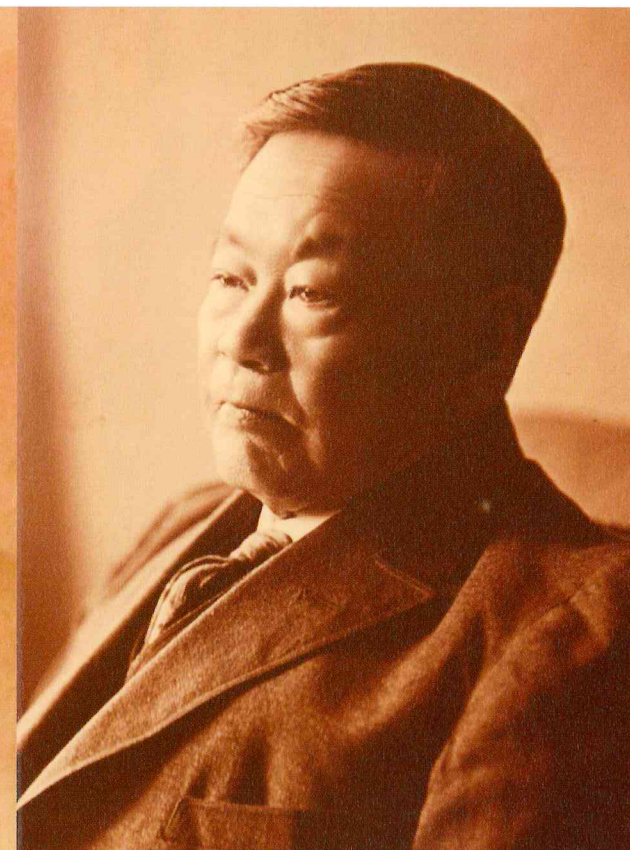


2017年、山火事の被災後に焼け跡から見つかった長沢の刀は現在、サンタローザのワイナリー「パラダイス・リッジ」で展示されている。



時代は、 その少年に 何を望んで いたのだろうか。

KANAYE NAGASAWA 1852 - 1934



引き寄せ合う長沢の魂、 今新しい旅が始まろうとしている。

彼の没後90年、長沢の遺伝子を引き継ぐ者たちが、カリフォルニアに集結する。鹿児島に生まれ、焼酎づくりを学んだのち渡米。自力でワインメーカーへの道を切り拓いた石窪俊星氏。またカリフォルニアを代表するワイナリーでワインメーカーを務める赤星映司氏は、長沢の弟・弥之助の子孫に当たる。そして長沢とともにワインづくりに取り組んだ甥・共喜の子孫である伊地知ファミリー。今回の企画展では石窪俊星氏をナビゲーターに、彼のワインづくりにかける情熱や長沢への想い、長沢のワイナリー跡地に建つパラダイス・リッジでの三者の邂逅など、ゆかりの地を訪ね、多くの方々の証言を集めながら、長沢の人生～long long journey～の続きをドキュメンタリー映像やパネル展示で描き出した。2011年、開館に向けて展示資料の収集に苦闘していた薩摩藩英国留学生記念館は、先行きが見えない中、すぎる思いでカリフォルニアへ渡った。そこでの出会いがプロジェクトを大きく前進させることとなった。長沢の甥の御子女である、伊地知コウスケ氏とエイミー氏より提供していただいた貴重な資料がなければ、今の記念館は存在しないと言っても過言ではない。

13歳の時、藩より「長沢鼎」の名を与えられ最年少の薩摩藩英国留学生として渡英。その後、単身スコットランドで学んだのち、宗教家トーマス・レイク・ハリスの誘いで米国へと渡る。他の留学生が帰国する中、一人米国に残りコロニーで葡萄栽培やワインの醸造に取り組みながら40歳の時にカリフォルニア州・サンタローザのワイナリーを引き継ぐ。彼の醸すワインは高い評価を得て、カリフォルニアは世界有数のワイン産地へと成長した。移りゆく時代の波に翻弄されながら試行錯誤を重ね掴んだ栄光と失意の日々。孤高を貫いた日本人初の米国移民は、カリフォルニアの地で独身のまま、長沢鼎として82年の生涯を終えている。

